

【結果】ステージ別にみるとステージ1, 2, 3までは比較的全摘出, 亜全摘出が多かったが, ステージ4, 5では部分摘出が多かった。

【考察】以上の結果より, このステージ分類は手術治療の標準的ガイドラインの1つになりうる可能性があると思われた。しかしながら eloquent area の定義に各施設間でばらつきが見られ, 今後の課題と考えられた。

8 Glioblastoma Multiforme における O6-methylguanine-DNA methyltransferase (MGMT) 遺伝子プロモーターのメチル化と化学療法および予後との関連性の検討

小林 浩之・石井 伸明・池田 潤
 黛 豪恭・四戸由美子・澤村 豊
 岩崎 喜信

北海道大学医学部脳神経外科

DNA 修復酵素である O6-methylguanine-DNA methyltransferase (MGMT) は腫瘍細胞におけるアルキル化剤による殺細胞効果の阻害因子とされ, 近年その活性は遺伝子プロモーター領域のメチル化により調節されていることが示唆された。さらに Glioma においてこの遺伝子修飾がアルキル化剤である BCNU を用いた患者群の予後と強い相関性を持つことが報告され, 化学療法感受性判定のマーカーとして期待されているが, 本邦における中心的薬剤である ACNU に関してはそのマーカーとしての有用性, 妥当性は今後検討の必要があると思われる。そこで今回我々は methylation-specific polymerase-chain-reaction (MSP) 法を用い Glioblastoma Multiforme (GBM) における MGMT プロモーター領域メチル化の判定を行った。また MSP 法および COBRA 法を用いて, 他の固形腫瘍において化学療法感受性への関与が示唆されている DNA 修復遺伝子 hMLH1 と FANCF 遺伝子プロモーターのメチル化についても検討を行った。これらの結果をもとに DNA 修復遺伝子におけるプロモーターのメチル化と化学療法および予後との関連性を検討し報告する。

9 言語野近傍 glioma 2 例に対する覚醒下手術の経験

木村 憲仁・伊東 民雄・知禰 史郎
 尾崎 義丸・中村 博彦

中村記念病院脳神経外科

今回, 言語野近傍に存在する glioma 2 例に対し, 覚醒下手術にて摘出したので, 手術の実際・mapping における問題点などを報告する。症例1は26歳女性の左側頭葉に比較的境界が明瞭な glioma。症例2は29歳男性の左頭頂葉(角回・縁上回～上頭頂葉下部)に境界が不明瞭な浸潤性 glioma。両者はともに全身性痙攣で発症し, MRI ではほとんど enhance されない言語野近傍の glioma であった。術前検査に, 優位半球を決定すべく Wada test, fMRI, MEG, SAS, SLTA などの詳細な言語評価を行い, 術中覚醒下での言語課題は物品呼称, 文章の理解・復唱, 左右・手指の判別, 計算を行った。症例1は後方言語野が腫瘍の後方に変移しており, 腫瘍の浸潤していない海馬, 扁桃核, 鉤を残し全摘出した。術後は, 術前よりあった右上部視野沈下が右上1/4盲へと悪化した。失語症状は来たさなかった。症例2は腫瘍内にモザイク状に言語機能が含まれていたため, 上頭頂葉の一部の腫瘍摘出に留まった。術中 EEG にて一時 after discharge が出現し, 以後の言語課題を変更し mapping を行った。術後, 伝導性失語が約1週間持続したが, 改善した。EEG にて左大脳半球に slow wave が見られ, Tc-ECD SPECT でも左大脳半球全体の hyperperfusion が認められたことから, 術中 mapping 時の痙攣の影響が残っていたものと考えられた。

10 過去2年間に occipital transtentorial approach を用いて手術を行った症例の検討

中井 啓文・田中 達也・程塚 明
 橋詰 清隆・宮野 真・竹林 誠治
 桐山 健司・津田 宏重・和田 始
 櫻井 寿郎・石崎 賢一

旭川医科大学脳神経外科

過去2年間に occipital transtentorial approach